



漢方薬って何だろう

「年のせい」「気のせい」で済まさない

日本は専門教育を受けていない医師でも漢方薬を処方できる稀有な国ですが、私は最近まで積極的に利用していませんでした。東洋医学理論は難解でつじつまが合わないところも多いので、何度か勉強しようとしたものの挫折を繰り返してしまいました。病状から方剤を当てはめるマニュアルもあるのですが、理屈もわからずに処方することが後ろめたかったです。

今回私が漢方を勉強するきっかけになったのは、母親の脾臓腫瘍手術でした。病巣は切除できたものの術後の腹水・下痢が止まらず、低蛋白血症による全身浮腫がみられました。血管内は脱水になったため、ふらつきが強く在宅復帰困難で当院に転院しました。西洋薬の利尿剤は低血圧のため使用できず、漢方薬で何とかならないか調べました。水の分布の偏在を正す利尿剤（五苓散）を試したところ、腹水・浮腫・下痢が治まり血圧も回復したのです。良くなる時期と重なっただけかもしれないが、漢方薬の効果を実感できたのです。

勉強してみると西洋医学が病

因の追及に重きを置くのに対し、東洋医学は体内環境（寒熱や気・血・水）のバランスを重視しています。西洋医学では病原体や腫瘍など病因が明確で排除可能なら有用なのですが、そうでなければ無力です。症状を抑え込む対症療法には副作用も多く、治療困難なら「年のせい」「気のせい」とお座なりにされがちです。それに対し東洋医学は複数の生薬から構成される方剤で体内バランスの崩れを戻す治療なので、原因がわからなくても、排除困難でも、治療することが可能なのです。

超高齢社会で治らない疾患を複数抱える患者さんも多く、ストレス社会で心因性の身体症状を訴える患者さんも増えていきます。西洋医学で困った時に東洋医学の視点で見直すことで、逃げずに向き合うことができます。感じていきます。患者さんが長年訴えていた症状が、漢方薬で改善することも経験しています。冷えなどの体調を聞いたり、舌を視たり、足や腹部を触ったりすることが、薬以上に有効であることも否定できませんが、

笠間の歴史探訪 40

穴戸氏名馬

たまだれづか

「玉簾塚」の伝説

今から八百年以上も昔、鎌倉幕府が開かれた頃、將軍頼朝の家人八田知家が常陸国守護として入部しました。涸沼川を挟んで旧岩間町を含む旧笠間市・友部町・美野里町・茨城町など「小鶴荘」と呼ばれる広大な所領地が穴戸家政（八田知家の四男）に与えられ、以後「穴戸荘」として約四百年間領地を守り続けました。頼朝の有力御家人であった家政は「玉簾」という名馬を飼い、領内の巡視はもとより、山野の狩り、鎌倉の頼朝の御前に伺う時も常に傍らに置き、かわいがりました（上野長文氏文書より）。鎌倉から常陸国府間、その距離約三百キロメートル、頼朝が治承四年（一一八〇）、在地豪族佐竹氏を攻撃した時、八日間かけて常陸国府（石岡市）へ到着しています。途中鎌倉街道下道（東海道）を利用したと思われます。さぞや穴戸氏も御城から鎌倉府までの道程は大変だったことでしょう。

『岩間今昔誌』（昭和十年発行）は次のように伝えていきます。「ある時、家政の嫡子政周は父に許しを請い玉簾に跨り、鎌倉に赴き、一日にして穴戸に帰る途次、菅ノ谷にかかる（穴戸旧道滝尻）玉簾長途の旅に疲れ蹠（た）倒れて起きることができなかつた。郷人名馬玉簾の重大使命を果し城下近きに及んで斃れたるに深く同情し、高さ三尺（約一メートル）、周囲

四間位（約七・三メートル）の小塚を設け碑を建てて「玉簾塚」と稱し岩間名所の一つである」と。

現在、その場所を訪ねると、その古道は碎石所に通じる道として拡幅され毎日数十台のダンプカーが行き交う道路と化し昔の面影はなく、玉簾塚に建つ碑も見当たりません。しかし、それらしき子塚がひっそり道路沿いにあり、その裾に「文政二年馬頭観音」と刻まれています。道路の反対にはもう一基嘉永の年号が読み取れる馬頭観音の碑も見受けられます。その傍らを北へ真直ぐに一・八メートル幅ほどの古道が南小泉の林の中へ伸びています。この道こそが鎌倉へつながった鎌倉街道下道の枝道であったことを物語っています。

（笠間市史研究員 川崎史子）



滝尻から南小泉へ伸びる鎌倉街道枝道